藝文類聚

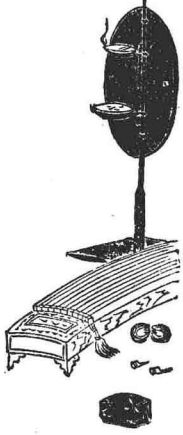
奇觚室吉金文述

紅葉全集

十七卷 宣統版

明治三十七年九月十三日印刷
明治三十七年九月十六日發行

著者　尾崎德太郎
發行者　大橋新太郎　東京市日本橋區本町三丁目八番地
印刷者　飯田三千太郎　東京市牛込區市ヶ谷加賀町一丁目十二番地
印刷所　株式會社秀英舍第一工場　東京市牛込區市ヶ谷加賀町一丁目十二番地
發兌元　東京市日本橋區本町三丁目　博文館



十千萬堂藏版

紅葉全集　卷之五

目次

多情多恨前編……一
仝　後編……三一五
安知歇貌林……五五一
　月下の頭巾……五五一
　夜中の代診……五六四
千箱の玉章……五七二
寒牡丹……五九五
　(一)　雪中の狼藉……五九五
　(二)　不幸の盃……六〇五

紅英全集

目次（三）

（三）背の冷汗……六三四
（四）掌上の人形……六四九
（五）一萬五千ルウブル……六六九
（六）老の歎願……六八四
（七）門前の一瞥……六九五
（八）驚天動地……七一三
（九）結婚の刑……七二二
（十）財産目錄……七四四
（十一）文中の秘密……七六三
（十二）勤儉貞淑……七七一
（十三）恐怖と寒さと……七八八
（十四）村の記錄……八〇五
（十五）兇險の相……八三三

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

（十六）窮命の淵……八三七
（十七）減水の量……八五二
（十八）御神の審判……八六〇
（十九）令聞嘖々……八七五
（二十）賢婦忠僕……八八一
（廿一）特赦の天使……八九二
（廿二）燈下の指環……九一七
（廿三）配所の雪……九二八
（大團圓）花の都路……九三二

多情多恨

前編

(一)

鷲見柳之助は其妻を亡つてはや二七日になる。去る者は日に疎しであるが、彼は此十四日をば未だ昨日のやうに想つてゐる、時としては、今朝のやうに、唯の今のやうにも想ふ。餘り思ひ窮めては、未だ生きてゐるやうにも想つてゐる。なるほど病の爲に敢無くはなつた、氷のやうに冷えて、美しい目も固く瞑いだ、棺へも斂めたれば、葬送も

出した、谷中の土に埋めて、榛の位牌になつて了つて、現在此に在るからは、假でもなければ、夢でもなく、確に死ぬだに極つてゐる。如何にも其軀は葬られて、其形は滅したに疑ひは無いが、彼の胸の内には、その可愛い可愛い妻の類子は顯然と生きてゐるのである。

柳之助は多く人を好かぬ、代には又多く人に好かれぬ性で、男では朋友の葉山誠哉、女では妻の類子、此二人の外には世界に柳之助の好いたものは無い。彼は多くの人を好く代に、唯此二人を好いたのであるから、その情の篤いことは夥しいもので、實に見苦しいほど其妻には惚れてゐた。

一も妻、二も妻、三も四も五も類で無くては、柳之助の夜は明けなかつた。彼の同僚は（妻が）先生と仇名を付けたほどで、妻は彼の命であつたものを、彼は今その妻に死なれたのである。

然までに可愛がられた、大事がられた彼の妻は、決して然までに夫を思

はなかつた。謂はゞ通一遍であつたけれども、柳之助は少しも不足に思はぬのみか、それが女子の性と信じてゐたのである。例の同僚は嗤つた、鶯見は全力を擧げて其妻に惚れてゐるのだと。其通り、（全力を擧げて）とは嘲弄でない、適評であつた、適評ではない、事實であつた。

彼は今其妻に死別れた。則ち彼は第二の生命を奪れたのである。一日生家へ行つて見えなくても、直に顏色を惡くして鬱ぐほどの愛著は、一週間經てど、十日經てど、乃至は一月、一箇年、十年が百年經たうとも、到底二度とは其姿を見られぬに極つた失望を忍ぶには餘る。さては是非も前後も、分別も用捨も何も無く、一圖の悲歎に沈むで、泣くと悔むの外は殆ど世をも人をも身をも忘れた。我是ない子供のやうに、（お前は何故死んだ。死ぬことはならん。死ぬといふ法は無い。）と、死顏の被を取つては、棺の前に坐つては、墓標を搖つては、位牌を眺めては、寫眞を

取出しては、聲こそ立てぬが、心の中では悶え〳〵て絶叫また。

悔むで復らぬ事、悲むで復らぬ事ぐらゐは、柳之助も知つてゐる。復らぬ事を復さう爲に泣きも悔みもするのではないが、或點まで泣き且悔むだらば、隨分復る事との信仰を以て、泣きも悔みもするのではあるまいか、と想はるゝほど柳之助は取亂したのである。

その狂哀も漸く失めて、今は眞摯に其死を悲む涙が催して來る。諦められぬ、諦められぬ、諦められぬが、定命と諦めねばならぬ——諦めて見た。諦めては見たものゝ、一旦生死の手を分つたからは、類は二度と再び此世には歸らぬ人、これから長い〳〵一生涯もう逢はれぬ、となつて見ると、その心細さ、味氣無さは居ても起つても堪へられぬ。此二三日は全く生効の無い體になつて、唯二件の事を思窮めてばかりゐる。

一つは、可愛い可愛い妻の生前の事。二つには、此先何を樂に生きてゐやうと云ふ事、此の二件が渦になつて、間斷無しに柳之助の胸の内を回

轉ぢてゐる。甚麼に考へたところが、此先の樂は無い、ばかりか、現在今日生きてゐる空も無いのである、と云つて、豈死なれもせぬ、と云つて、愁ひ生殘つて物を思ふも愁い。思ふまいとぢても、忘れやうとぢても、寐れば夢を見る、起きてゐれば、唯其事が紛々と胸に集る。

「吁、酒でも飲まう！」

と柳之助は憤れたさうに目を瞑つて首を掉つたが、直に置火燵から身を伸して、床の間の喚鈴を鳴したまゝ、内向に手枕をぢて了ふ。徐に階子を踏むで、物柔さうな四十恰好の婢が昇つて來て、

「御用でございますか。」

と座敷の紙門を啓けると、柳之助は俯いたまゝて、

「酒を一つ買つて來てくれ。」

その力無げに仆れてゐる躰を老婢は怪むで、

「どうぞ爲さいましたか。」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

と體を差入れる。

「可いから早く買つて來て。」　と彼はなほ顏を擧げぬ。

「はい、はい。麥酒ならお內にございますが、やつぱり御酒の方が宜うございますか。」

「麥酒でも管はん、早く持つて來てくれ。」

老婢は慌忙しく下りて行く。その跫音と俱に一陣の風は颼と梢を鳴して、吹懸くる時雨に北窓の障子は氣立ましい音をまて倏忽濕々濡になるのを、柳之助は纔に首を擧げて見たが、又俯いて了ふ。

空は一面に微晦くなつて、雨は一時劇しく降出す。襟元から肅々と惡寒くなるのに、火燵の火さへ消えかゝるので、横になつてもゐられず、物臭さうに起上つて、急に黯くなつた家の內を、何と云ふ事は無しに惘然眴してゐる。爾時老婢は蠟色の圓盆に、鉢に鷄子を三つ容れて、醬油注に小皿、小蓋物に箸箱、コップ等を載せて、片手には櫻田麥酒の栓を拔

いたのを挈げて入つて來る。

「御火燵にお火はございますか。何だか又寒くなつて參りました。」

「あゝ、火を少し貰はうか。」

と其處に置いた盆を引寄せて、コップを把ると、恐多さうに老婢の酌をするのを、何と思つたか一寸見て柳之助は直に横を向く。それを見付けると、老婢は忽ち點々と涙を零した。柳之助は又其を見るとコップを持つたまゝ俯いて、滴々と涙を落す。老婢は壜を下に置くと、袂から鼻紙を出して頻に泣き始めた。

柳之助はコップに半分ばかりを一息に嚼了けて、

「元、寂しいな。」　　と故と元氣好く言懸ければ、

「御尤でございます。」　　と元は益泣く。

此挨拶ては不足らしく、

「あゝ、寂しいよ、寂しくて可かん。」

と重ねて訴へたが、急來る涙を防がう爲に、餘れる酒を又一息に呷と飲むで、

「もう一盃。」

此酌に就いて彼は考へたのである。お茶一つ上るのでも、奥樣の御手からでなくば御承知の無かつた旦那樣が、元のお酌で上るのみか、注げと有仰る。嗚呼御傷しい。例ならば（類さん）を呼べと有仰るのであるけれど、その奥樣は御在なさらない。お寂しいとは御尤だ、と老の涙さいとど脆かつたが、やがて忙しく目を拭いて、洟を去むで、もう泣くまいと覺悟またやうに紙を袂に入れて了つて、

「それに今日は姻家の奥樣も御歸になつたものですから、急に猶の事お寂しうございます。」

と盆の物を安排まて、鷄子を割つて其へ出しながら、

「何も御肴がございませんので。本當は御精進なのでございますけれど、

姻家の奥様が其には及ばないと有仰つて、此間から旦那様だけには御魚や肉を差上げて居りますのですから、お鶏子も宜うございませう。」

「あゝ、それぢや何か、姻家の家母様やお前は精進なのか。」

「はい。」　と老婢は又少し萎れる。

「然うか。」　と頭を掻いて、

「些とも氣が着かなんだ。」

「いゝえ、旦那様はお宜うございます。」

「いや、俺も其ぢや精進にまやう。」

「然やうでござりますか。それはまあ何方かと申せば、御精進の方が、」

「佛の爲だな。」

「然やうでございますとも。」

と其可憐さに老婢は又涙を誘はれる。

「咲、もう佛に成つて了つた！」

耐りかねて柳之助は水でも飲むやうに一盃の麥酒を盡して、ほうと息を吐く。老婢は起つて、火を持つて來て見ると、柳之助は目を閉ぢて、壁に靠れて、少しは醉つたやうな、多くは物を思ふやうな態で、曹然とまゐてゐる。

元は火燵の始末をまゐて、盆などを片寄せて、起たうとすると、主は弗と目を開いて、

「何時かな。」

その倚つてゐる壁に時計の掛けてあるのを老婢は見て、

「四時七分前でございます。」

「これから一寸墓詣に行つて來やうかな。」

と柳之助は障子の硝子越に外面を眺める。元は有繋に驚いた。如何な事でも一日に二度も墓詣をするものがあらうか。今日は二七日であるから、朝の内に谷中まで詣つて來たばかりである。それも近い所では無し、ま

して雨は降る、日は暮れる、これから如何なさらうと云ふのか、と其氣色をば候つたが、隨分出掛もまさうな樣子。

柳之助の身になつたらば、懷しい〳〵遺骸の眠つてゐる所は、目に見えぬ魂魄の猶留る屋棟の下よりは、追慕の渴を醫するに疑無い。彼の墓詣をせうと云ふのは、生きてゐる人を尋ねると同じ意で、戀しさに堪へかねたればこそである。

恁う考へたらば、別に不思議は無い。老婢も然うとは考へたのであるが、極めて不思議に思つた、或は變に思つた、些と氣が如何かまたのではあるまいかと思つた、然う思ふと、何と無く可恐いやうな、心細いやうな、途方に晦れたが、左も右も留めるより外に法は無いと思案まて、

「もう今日はお遲うございますから、明朝になさいまし。」

「遲くても可いさ。」

「それでも、今朝もう一度御詣をなすつたのぢやございませんか。那麼

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com